

L05a SUBARU/IRCS を用いた D 型小惑星 773 Irmintraud の近赤外分光観測

菅野愛 (東大理), 廣井孝弘 (ブラウン大地質), 中村良介 (NASDA),
安部正真 (宇宙研), 石黒正晃 (宇宙研), 長谷川直 (宇宙研), 宮坂正大 (東京都庁),
関口朋彦 (国立天文台), 寺田宏 (国立天文台), 五十嵐丈二 (東大理)

2000年1月にカナダの Tagish Lake の氷上に落下した Tagish Lake 隕石は、その反射スペクトルから D 型小惑星に由来する最初の隕石であることが示唆された (Hiroi *et al.*, 2001)。我々の研究グループは、D 型小惑星と Tagish Lake 隕石との関連を近赤外波長域でより詳細に考察することを目的とし、D 型小惑星 773 Irmintraud の近赤外領域での反射スペクトルを得ることを試みた。

我々の研究グループは、2002年2月22日から23日にかけて、国立天文台すばる望遠鏡赤外分光撮像装置 IRCS を用いて、D 型小惑星 773 Irmintraud の近赤外分光/測光観測を行った。取得したデータの種類は、 $J(1.18-1.38\mu\text{m})$, $H(1.49-1.83\mu\text{m})$, $K(1.93-2.48\mu\text{m})$, $L(2.84-4.16\mu\text{m})$ バンドの分光と、 $J(\text{center}:1.25\mu\text{m})$, $H(1.63\mu\text{m})$, $K(2.20\mu\text{m})$, $L'(3.77\mu\text{m})$ バンドの測光である。また、小惑星の自転による表面放射光の変化を補正するために、山梨県宮坂観測所で R バンドでの測光観測を行った。観測は 2001年12月23日、2002年1月5日、1月15日、2月22日に行い、小惑星のライトカーブと自転周期を求めた。本講演では今回の観測結果を示し、D 型小惑星の表面組成と Tagish Lake 隕石との関連について議論する。